

持43

302

福人郎著  
教訓妙言談

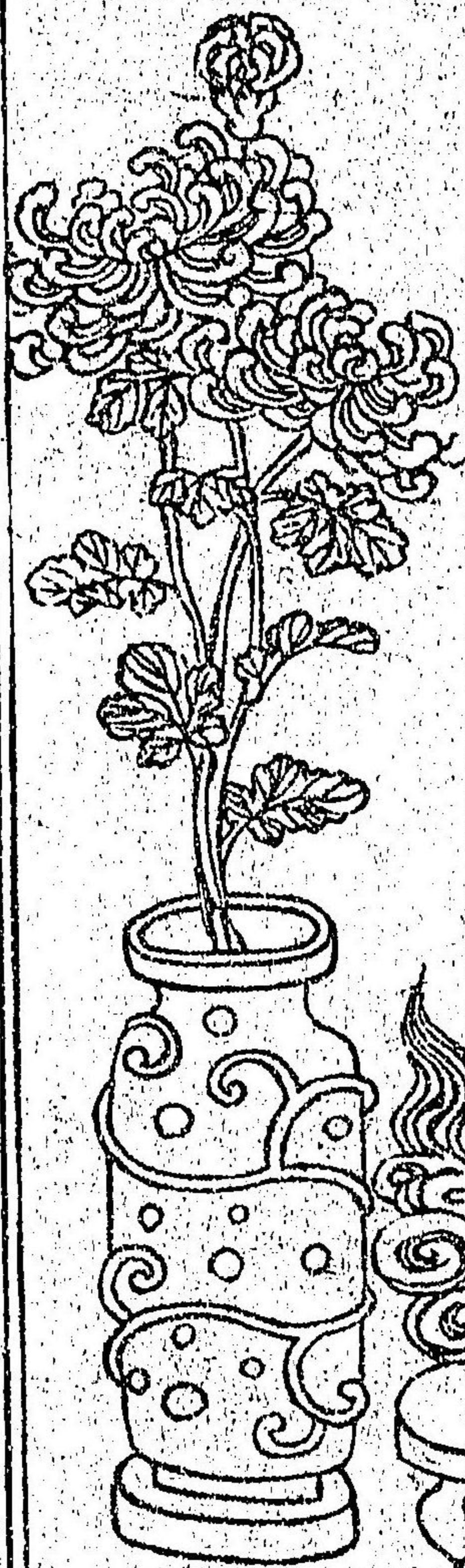
二編



泉龍亭是正著  
櫻齋房種画

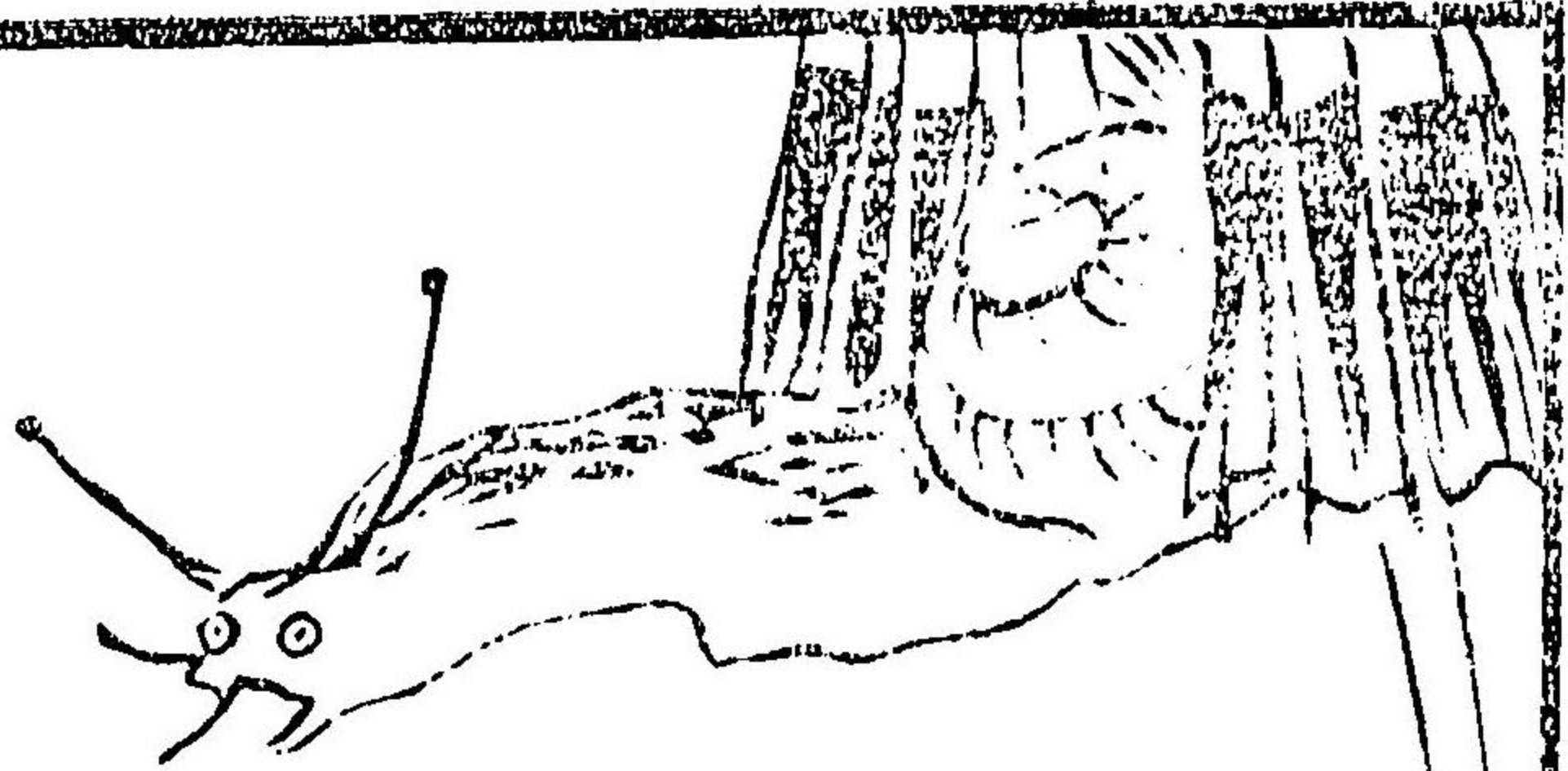
栗園藏梓

役者教訓妙々奇談二編



妙々奇談 二編 二幕  
晴道禪寺の段

版元日上



刻画ノ用紙ニシテ位子筆を  
踏み及ハ様ハ其ノ意ヲ勤ルル  
此ハ好キ者初ニハ妙々奇談ノ能者  
泉龍亭是正ハ其ノ初編ヲ著スル  
初編後新編ノ社説アリ





妙たねの考こう後ご 睦むつ道どう禪ぜん寺じの殿だん  
二編にへん序じゆ幕まくら

版ばん之の口くち上じやう

則すなはち一いつ用よう心しんを以もつて其その位ゐを考こうへ  
臨りん之の後ご獲とふ其その心しんを考こうへ  
此この心しんを考こうへ其その心しんを考こうへ  
其その心しんを考こうへ其その心しんを考こうへ

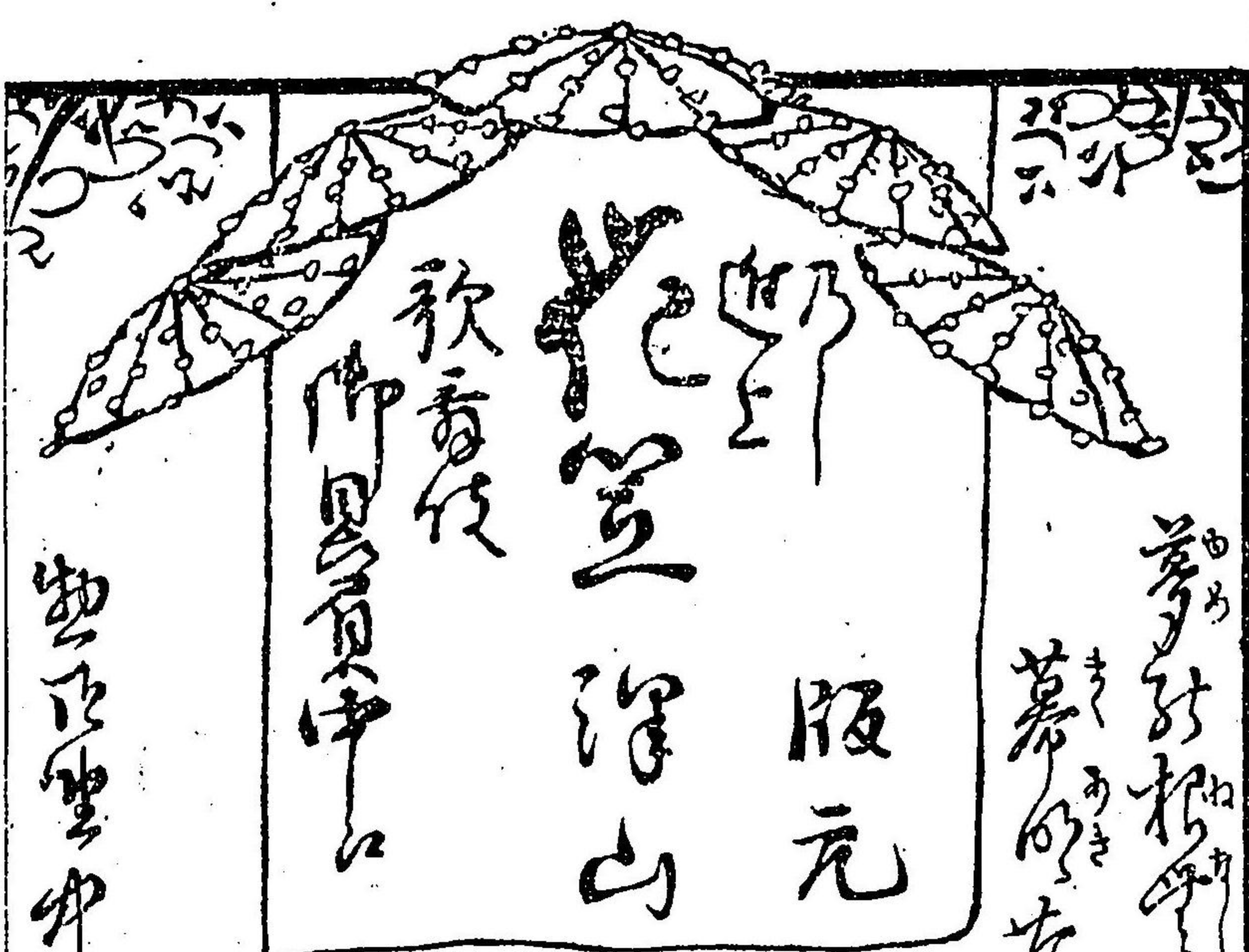
初はつ書しよ後ご新しん雅やの社しゃ院いん一いつ考こう心しんを以もつて







市を結ぶと赤と紫とを破きしを紅紫の湯屋と  
 肩に手拭ひ提燈を引掛てて火たる由人語を  
 一けん丹懐子抽き。蒲舟若茶利の北舟  
 一五合若茶。中央お杉屋と初出ひの家  
 青蓮と龍の飯を有る南雲の書ももたしん  
 こゝろ方おり懸し細を時をきと流すつらの屋と  
 るふたう甚多う懐念と後号し結語の歌と  
 お舟を傳はし方とまれば是れ飛と一トの傳  
 さぬやらの心の細く干しとゆへり人さう



夢野村のついでに  
 幕のたまたま坊主の懐香もや

加賀牛のついでに  
 福の病も一様米歌  
 花の社も伝はる花の  
 解の目合も一様舞  
 付の目合も一様中  
 花の社も伝はる花の  
 佛国百中のついでに





張子の夢は是か此と云

まひしへは運命かかきも破

清きやうれは癒きを

よき世に人侍らば裁

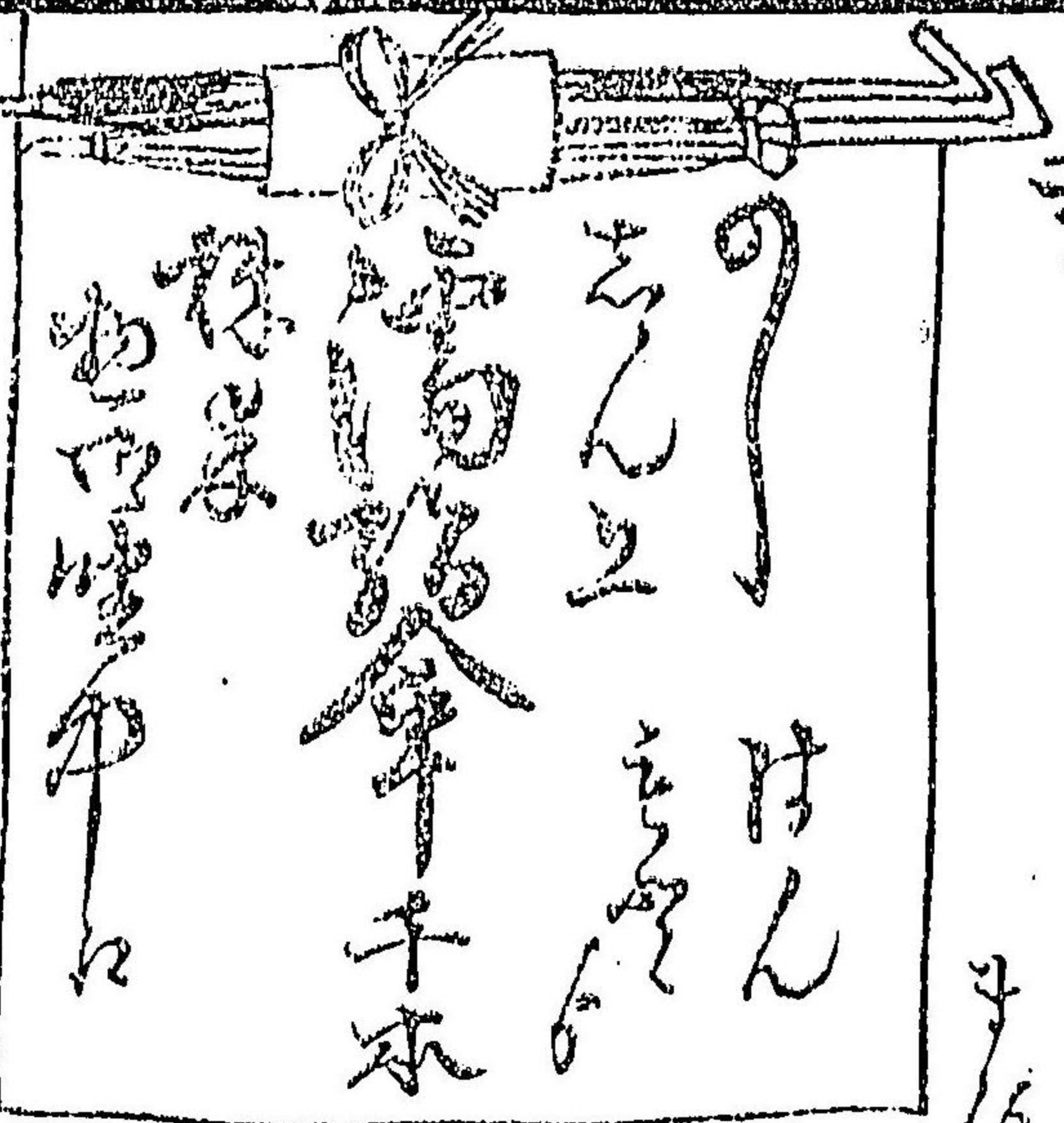
新しきものきききききき

左様ありしつらりし龍の

夢のよきききききき

夢のよきききききき

代官金後九世



夢の巻

けん  
ききき

物や壁平

千ヨシ〜〜〜夢の巻

〜〜〜カキ〜

孔子平日ふ問公直と慕ひ羨々周公と

夢に見王ふ殷の湯王天帝より良弼と賜ると夢見て傳説と得る夫

遙の唐土ふて是は日の本僕へ元より伝る六ヶ敷チンファンカンの漢

学知らざやつらう俗ふドンチヤンと嚙子立たる劇場と明暮慕ふ

心より此春思へま眠る間ふ彌陀の御国の俳優か教み因て奇談

の本と得ぬ今ふ眠りの覚やらぬと幸ひおいて跡と望こい俳優猶も後

の巻と綴るととの催促よすも亦無気本筆の筆白川夜舟へ漕著一文

書ハ拙むた業かうう今盛んか俳優の内所の幕の黒白漆其内幕と

引明ればとどまらちふ鳴こする親父がかかとも老婆心いしぬ潜上老の身

明治十四己長月

泉竜亭是正記

又皆一







2/11

1/11



役者教訓妙々奇談二編

泉竜亭是正述

浪花嵐なげは市川いちがわの濁水なぐりみづ

市川いちがわの流ながと爰こゝふ汲人くみびとへ名なも川崎かわさきと濁り井くみいの色いろと欲ほと  
 ぬ底そこ深ふかき御具ごぐ負お厚あき市川いちがわ権十郎けんじゅうらうへ今日けふの業わざと良よ々  
 果たまて我家わがやへ戻かへる下谷道あややちの上野うえのの方かたへ人ひと在あて「コレこれく力ちから  
 松まつくと呼よ人ひとなり権十郎けんじゅうらうへ不ふ思し議ぎよ思おもひ我われ幼名こななと  
 呼よつるへ此こゝ東京とうきょうよ珍めづしと頭かぶと返かへして能よ見みるふ豈あま  
 謀まらんや亡な師し嵐あ璃り靨くでなり「くく開ひらけ敷しも車くるまと下くだ

絶とて久ひさ敷し疎そ情じやうと述ゆはと師しへ不ふ服ふくのゆりきぬりもく怒いか  
 氣き面めんふ頭あへ「こゝ和わ王わうへ一寸いちゆん言こと分ぶんがらる故ゆゑ私わがと一いつ疔ぢやうふ  
 来きやるがりと邊へりふ在あり茶店ちやてんへ入いり床机せうぎへ已お腰こし  
 ろち掛か権十郎けんじゅうらうと信まと白眼びやくがん我われ無常むじやうの風かぜふ誘まへ是こゝ冥めい  
 途と黄泉わうじんよ在あり十じゅう万まん億いふ土どの遠とほき故ゆゑ和主わぬしへ吾われが何なにも知しらぬ  
 と思おもひ能よとよ「種たね々々我われ終はと拳こぶし動うご条ぢやう何なにぞや吾われの  
 知しらざらん常言じやうげんふりふ未も来らいらんナ迅速じゆんそく千里眼せんりげんと  
 娑婆世界しあはせの善ぜん悪あくへ今世いま上うへふ行ゆはと「弦ぢやん鉄てつ便べんりて



知らまより猶早より常張の鏡へ寫して見る時ハ  
 和主が諸行一ツとして吾が心は適ぬあり先第一は  
 氣よ入ぬ去頃吾が俳名と其俣ふ附たるハ誰が免  
 一と名衆一とある一個の了簡あるとソリヤア師の  
 名跡と弟子の身で續ざる者と何れ彼是言ふは  
 絲と和主も知ツての通り吾が連合老婆どもも達者  
 で世界は居となれば一應の咄しものあらん何の  
 沙汰もあらざりて和主が名前と替と故老婆殿

は彼是言ふ其時璃鶴の鶴と書替へ璃珪とあるは在  
 らう見ゆけハ美敷る玉有うが心の内が石瓦とやア  
 人のごりも愛相が尽るよ今更愚痴と言ふやアねが  
 和主が東ふ登りより斯御具負ふ預るも誰が  
 蔭と思ひ一とや皆吾が仕込と今更一人で覚一様  
 なめ成仕うちが氣は適ぬハ加之老吾は對一終一  
 度も香花や手向の水とせよとなく餘り不順致働  
 らく故吾が口より言ふは師の天罪が其身は



報ひ去頃毒婦の衣よ思はし其身の苛責の杖下へ陥  
 入り轉るや懲役とあり赤き衣よ何れも耻うへて救免  
 の後の先非と悔我の非業小死ぶるか衣憫然と思  
 散髪坊主の扱置て久離々々坊主よ姿と変え一生  
 の衣が菩提とも吊ふべきが人情あるよさの非ぞして  
 懲役が許むや否や権家へ諂ひ恩名と抛つて市川  
 権十郎と名乗又もや劇場小出勤ふ一舞臺小於  
 て口廣くも我懲役とありたる耻とせりふ小交せし

言たそりるダイヤハヤ呆れと言がのぬへ恥を知らぬ  
 へ耻うのと例があの和主が様な者をやりのめを  
 夫ふ此節尊小聞べ実々虚言のあつ糸ども金銀  
 溜るが面白さ頗る和主が慾張初め顔厚皮の具  
 負のお女中様とおまりて男色と賣とやら何も根  
 が瀬戸物屋の息子逆そり無生よ破とぐる小も及ばぬ  
 とだく聞べ此節諸色が高直とく自前相場小一本  
 一田二分と極とそりるゝとんだ新芋でつるソ人



九又廿三



山嵐 (あま) 嵐

璃鶴茶店 (りかくさてん) 茶店

市川権十郎 (いちがわごんじゅうろう) 市川権十郎

旬 (しゅん) 旬

後三



尤も和主の物ハ筋澤山で達者でもあらうけれど能物  
 も考へても見るがら女色ハ男子の身と削ると  
 やら如何よ金ダ欲い逆身の程知らぬ荒嬉不節男  
 傾城人でまー猶飽ぎて此中も湯島の邊よ住と  
 あふ岩ハ御方が和る権妻殿を唆し向島の柏屋よそ  
 数多の金子を貰うことやら取とやらで巡査の君へ拘引  
 ーと新聞紙上へ記きて再び耻とさうー揚身命  
 と抱つても金が欲いと思ふのいどうー過去の因果

ぞや世よ言ふ和主ハ金中の餓鬼あり最も無てな  
 らぬ物なぐら用よ立よ世の宝貯へ置ば石瓦和主  
 なごの斯も危い橋と渡り頗る金と貯藏とて驕  
 奢み募るといふでもまー鰥寡孤獨ハ猶恤まほ可惜  
 財と積置きて金の番まる其身とを一文不通ふ劣る  
 べー但ー老たる其後を樂む心うあゝ絲も花の盛  
 も一夜で散あり小皺の寄し紙幣と引射火てハ虫  
 干るー樂む和主の心根が一躰吾も分らぬ人慾よ



方圓の無りので又も此節風説に聞ば大莊立派る倉  
 と建是うそらく質店と開業と東京中の大評判  
 イヤハヤ此上ふも利欲の事と初めたら吝嗇坊が詮  
 方がわめく仇りまくい慾張過るも時ふゆる役  
 者まどの身分よて十露盤まどと手み取と昔が今  
 よ覚へがねくと目小角立てをちくくと白眼附たる師  
 の一言権十郎ハ胸よ置胸算用と一々ふ打割れする  
 ニツ玉師が教訓ハ五段目の鉄炮場より怖くともれる

猪食ふ報ひごと今更慙愧の邸宅も今戸目立つ我  
 住居隅田河原と表ふる一人かもねん権十郎筑波お  
 ろりの名残さ身よあむ秋の風よ醒され思ハぞ知ら  
 お身と起し邊りと見まど覚束る今迄見へ師の  
 影ゆらぎ事問ん人もなく浪間み遊ぶ都鳥浮寐の  
 夢よ師が教へハ我身よ覚へありや  
 大太夫が清信よ神靈過世と説  
 月よ日よ雨よ色ゆる杜若祖父の頃より美より岩井の



水みづは咲さ深こる花はなの笑え顔がほの半はん四し郎らう我われ業わざも此この程ほどに残のこ  
 暑あつの暗くらと凌しのぐん為ため暫しばし一いつ程ほどに休やす暇まとあり新しん嶋じま原の  
 仮かり居ゐと退ひ我われ本ほん宅たくのち一いつ曳ひの山やまの宿しゆくめを立た帰かへり稻いな葉は  
 そよ吹ふ秋あき風かぜは昼ひるの暑あつさと返かへさんと榎えん子この此この方ほうへ立た  
 出いつ流ながる月つきと詠あやし折やう冷ひやう風ふう颯さつと吹ふ来きり一いつ度どふ消きる  
 燈とう火かの下したみいむ者ものとそめりさひ月つき影かげは能よく見みえを忽たち  
 然さと一いつて位ゐ官くわんの老らう翁おう出い現げん在ざい一いつ頭かぶの霜しもと頂かぶき鬚ひげ長なが  
 やうふ素そ雪せつのどく身みよふ白しろ衣えと着きり右みぎ手てよふ一いつ束つかの

こせ田の稻いな穂ほの花はな盛さかりを携たへ脚あし然さと一いつて見みえ玉たまへを  
 大おほ太おほ夫おとのうらち驚おどろき開ひらけ敷しき形かたちと改あらめ道みち士しの何なん国こくの君きみ  
 めぞあると左ひだりも態てい敷しきよ礼れいと述のべ神かみ翁おきな莞わん示しと笑わら  
 玉たまひ汝あたへ我われと見み知しらぬも道みち理りあり予よへ是こゝ汝あたが家いえ岩いわ井い  
 家いえ五ご代だい目めの俳はい優ゆう人にん俗しやく名な一いつてお多おほ福ふく半はん四し郎らうとつくる者もの因ゆゑ  
 あつて京きやう地ち稻いな荷か山さんと信しん心しんま一いつぬ彼か利り益えきと受うるの後のち  
 信しん心しん怠たいり再またび罰ばつと受う腕うでと煩わづらふ猶なほ執しつねくも六む代だい七しち代だいと  
 崇たかり一いつへ斯かく云い我われ眷けん属じゆくあり一いつと世よ人にん知しる一いつ玉たまへお一いつ説せつよ



五代目半四郎常ふ氣よ入の妻なり。故らるる。恪  
 氣と發し、堪忍の二字と忘と長き烟管と振らげ、妻が腕  
 と甚く討つ時、のどぐも有りやせん殺ま心なるれ  
 ども終は是ぐ元とあり黄泉の人とあり。一より妻が  
 魂鬼の腕よまつり、汝が父の代までも崇りのつり。と  
 宣へども其の疑へし、一説あり、妻なる者の恪氣と有  
 る實一やふ聞ゆ、まどもか女中方の飽きをも恋慕へ  
 ば、一俳優の身が只一人の妻ふ迷ひ恪氣と發せし謂

まやりの侍る虚説へ扱置て抑々汝が父の代までも一  
 の崇り有るる。五代目か多福半四郎京地へ登り。時  
 我今度浪花よ於て大入と為むん、誓つて再び故郷へ  
 へ戻るまどと我神前へ立願み。ぬ未だ其頃へ世の中  
 の政事もまどと我生御魂と信ぶる者願ひ  
 一因て社より管といくる。差出一ぬ抑々此管といくる  
 へ青竹一尺程と切其真中よ一ツの節なり。是と隔とる  
 一左右の方へ我牝牡の眷属と封ト込若望と一輩ら



ろくべ此動物と授ると云々然を是と頂くのみ常不  
 居間ふ莊り置種々の窺ひと立ちふ若願望成就の上  
 隔の節と接て牝牡共み為んと願ふ眷属とれと悦び  
 前後の吉凶と告ると鏡小写して見るが如し然を五  
 代目半四郎も斯る動物管を希請斯の如くして窺  
 ひ成立芝居奥行ふ及び度判断の過ちなく自然と  
 諸人の敬愛と招き御具負多く浪花津みなる事而  
 三年再び東へ下りても猶評判よく遂に大和屋の開山

とありぬ是偏に我眷属の守護よ因る斯願望成就  
 の上先約の如く牝牡が隔の節と接し眷属喜びふ  
 絶て同穴の契り浅うらむ数多の子と設け曾て他人  
 ろみ見へねども我眷属家内と這りふと鼠の如く五代  
 目半四郎合更是と穢く思ひ腹臣の下僕左藏と云る  
 者よ命ト密は是と我神前へ飯納為んとりふ左藏領  
 掌して一匹も残らざ一櫃ふ捕入是と封ト主命ふ  
 隨ひ東海道の驛路大井川まで至りしが左藏突然として



役者二



月半の  
 下四郎  
 稲荷の  
 神勅  
 と聞

口  
律書





横着と生ト我此動物と携へ京地まで行ふ及ばざ此痴  
者ハ川へ投捨て旅用の半途ハ我酒食の料ハ代んと川  
越共と急ハ川の正中へ至ると見えハ忽ち櫃とざん  
ぶと投込と折ハも漲る急浪ハ櫃ハ漂々然トハ其処  
とも知らぬ大海へ昼夜ともまく漂へり流石通力自在と  
ハども取附嶋も無ハのうら哀むハ一敷多の眷属ハ  
一櫃の内ハ有りて飢死ハまを是非ハ一扱亦左藏  
ガ奴ハ日と経て東へ戻り彼納る物ハ仰せハ随ハ彼地

へ故ハく納めハ一と太夫ガ前と安々欺き何も喰ハ振  
るる有り然ハ此罪左藏ハあはども元是太夫ガ帰依  
ハより其身利益と受ハ早くも利勝と忘却ハ  
加之ハ眷属ハ夏蠅思ハ飯納ハさんと致セハ有り恚ハ  
禍ハ引出せハ我眷属其元ハ崇りとハ恨ハ暗ハ  
んと其年ハより五代目半四郎腕と煩ハ怪ハハ遂ハ  
我眷属の掌ハ似ハ猶執ハなくハ六代七代と崇リ今  
汝ハ八代目ハ當リ猶禍と下ハまハ常言ハハ

役者二

十三



聖真ふ敵ま—汝が諸行を了く見るみ業よ似もやら  
お慈悲ふく情らう心さる優—き故我眷属も感ある  
の餘り今より崇りと為よわろぞ却つて其身と守護  
まらあり然べ真心あり—者の天地神明の御加護厚く  
汝容妓の粧ひよく一度舞臺へ出—まべ譬ひ狂言を  
みさげとも價へ千金の色あり—と看客様う賞め玉ふ  
汝が花の姿よ代り今の浮世の風俗も異国へのつら押  
移り如何ふ流行るればとて後先の弁へもまなく俳優

の身と以て髻と切—やうも有—が扱々白痴と奴等  
で在り又焦る営業する時の折ふふれての御座敷方へ  
召らくともありぬべ—其時あそいのつらまもあひ毬  
栗坊主う振袖着てひらうら座敷へ出られへ照く  
坊主が病あげくり滝夜叉姫が狂気の様で誠し笑止  
千萬あり然べ此頃風聞ハ散髪頭と後悔あり再び  
一ツ竈と頭と直せ—族もあう—み汝計りの最初よ  
り若散髪とあうぬ身ふまべ此営業へ止べく思ふと



堅く辞して髻を切ぞ古例を守りー日本魂流石の東  
 の花と呼とー大和の開山大夫猶感ざるふ餘り有  
 へ常ふ神佛薩埵と信心ー熊先祖の年季を吊ふ心六根  
 清浄ある汝小令更物の怪の祟う何ぞ謂とほし夢々  
 疑ふとみるると翁の御声爽くふ一五一十説玉へ  
 半四郎の祖父親の過去因縁と初め聞く聞有ぐくも  
 又尊く猶此末も吾が行末と示ー玉へと神灵が白衣  
 み縋ると覚へーが是を月下の一夢の如く今迄ありー

老翁が姿の忽ちドツと消えてく失よりり

金で顔を播磨屋の大愉快

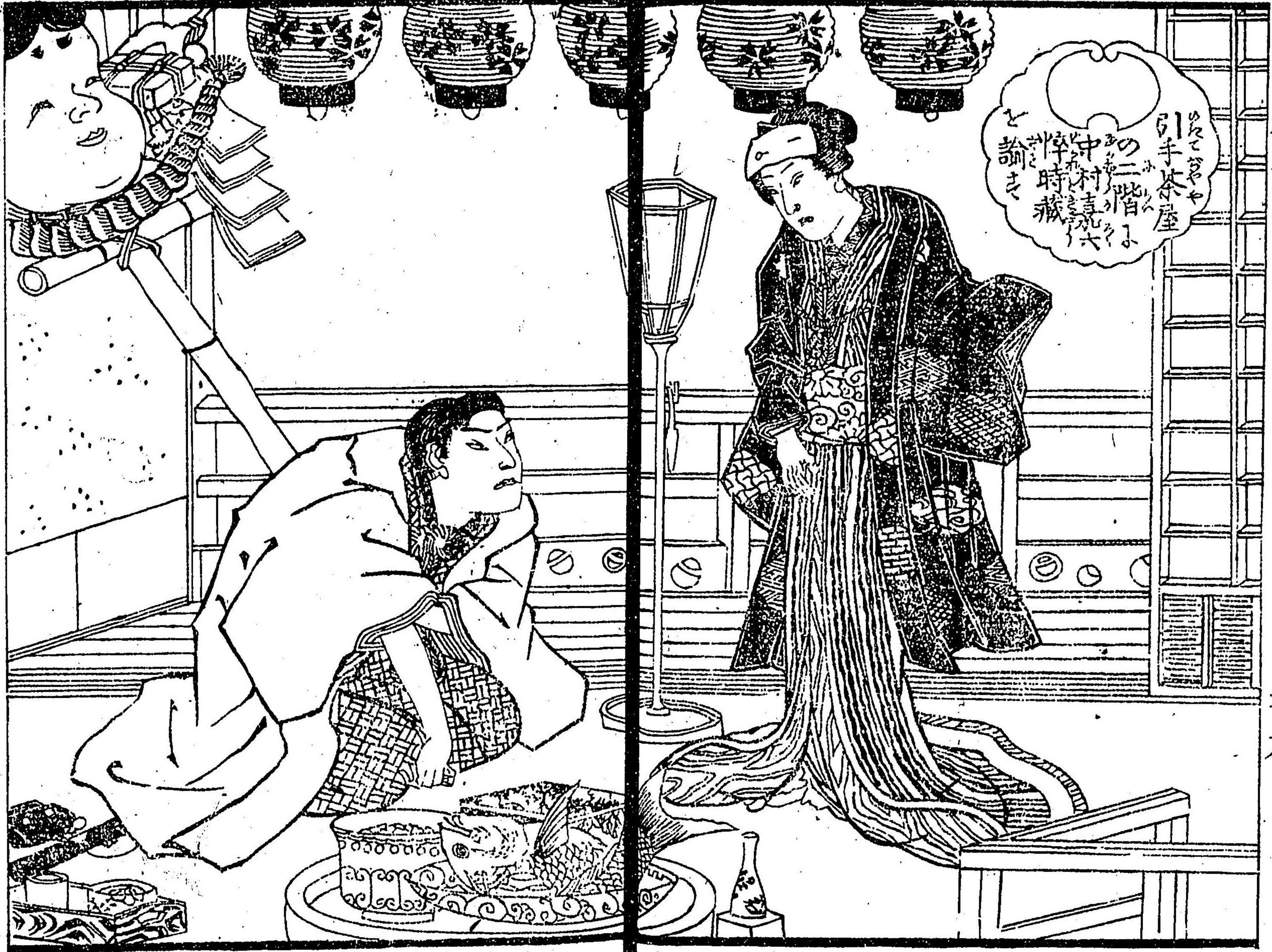
御客の人氣と就駕のもち参詣群集の其中ふ一際目  
 立中村時藏時と笑顔のか多ふくま火の熊手を擔  
 一の末社の大勢引連て下向の吉例を定まる時と違へ  
 ぬ花の里遊閣軒と並べたる新吉原へ赴きう馴染の  
 茶屋へ席と設け我日本の人氣を早く我身の方よ  
 搔寄んと大なる熊手と櫛子より雲井遙よ差出一



左右と照を挑灯へ名も高砂の播磨屋が気前もよ  
 や吉原の藝妓の限りうち招ぎ飲や謡やちりりか  
 が坐敷を取持拵間放戯交りの軽口酒戦の最中時  
 藏へ頗る笑壺ふ入る折り一間の襖風とあつた入り  
 来る者へ別人あつたむらぎも中村時藏が実父同名嘉  
 六あり取巻き大いよ仰天なりコリヤも袋様でいふ太  
 夫様よふまアお出るされいと手尔葉もあつた口上  
 主人迷つて敷多の取巻へ嘉六の来いみ面目るさ猫ふ

追ま一鼠のどく皆中座して逸失る此時嘉六も寄  
 年の額み浪の皴と共左も莞示よ笑顔と作りコレサ  
 何も私ぐ来さる其様み逃るといふりやアあ務への  
 是が何も堅気み息子を浮気みでもあやアあゆ人一元  
 よりどんちやん打離子狂気あつた営業で浮世を渡る  
 悴ゆ斯ふ戯さるものとまるも一ツの景気を取ら為が  
 へ夫と免や角り様みまんざら不通る親父でもね  
 が少一親父の言へ去頃和主が実兄中村嘉六と坂





引手茶屋  
の二階  
中村喜六  
時藏  
と論ま



東家へ養子とみり坂東あうのと成り故此親父も陰  
 むぐろ喜んで居る其甲斐もなく養母かへぬどのが坂東  
 三津三とり入者と出来しとやら兄い左を腹も立  
 ざりしと和主めがうらがるよ憤り忽ち離縁と進め  
 ーさうなぐ何故その様急腹と発せヨ大功の細瑾と顧  
 んぞ我家と嘲みぬる移ど此東京べハナ坂東あうらと  
 中村嘉六と名前ハ雲泥万里の相違薄命みりて早  
 世あうー坂東三津五郎どのと云ひ実父あうらとのを

花の東よ評判よく人気と勝て取し一方坂東一の  
 大和が家あり未だ名残の御具負多く加之島原の  
 太夫元へも肉縁なれば彼所ふ幸防して居れば兄イガ出  
 世ハ早うーと惜いこと仕出来しと入るとみ和主  
 が怒り無理よ離縁と勧めハ兄イガ出世と妨げーと  
 看客方の噂ありイヤ其風説で思ひ出さ兼て和主と浮  
 名も高き藝妓奴どののうら和主と打捨て他ハ膳と  
 向しとやらイヤ彼ハさうぞアねアノ時藏も些奴め古



臭く成とつて態と愛相と尽一と何と何と  
 世間の噂の聞一とど二人が薄情業や何ら何とも分  
 らぬ然ば奴の横濱へ娼妓とやらへ出のけと和主が子  
 もて生る女夜毎み替る客人がアリヤ時藏が色ね有  
 一が何と分やら定め一和主が為あうんと何やら和主が  
 沉一様で聞へも殆ど悪いぞよ身よ覚あぬ濡衣と雪ん  
 と思ふあり和主も今どの評判能や譬手元み金子へまく  
 とも一ツ身体と動一るべ三百円や五百円の都合いらつても出来

ぬべ一和主が知一訳より移一且浮名の立一女娼妓稼成  
 一て居て一和主が面皮よかろる道理彼と救ふと思ひあへ下際  
 腹の立あれども我子慈然と思ひやり奴が娼妓を引せ一我初  
 孫と和主が引取せよ云腹へ借物あり正一我が胤ありと宿  
 の娘もよふ云て夫婦中睦どろどろ我初孫と育てぬと寄  
 年浪の気も弱く涙片手よこの意見聞程つた時藏が身の云分も  
 暗き夜や四辺と照を灯火も消てをうま成ぬ父が嘉六の物語ハ  
 思ひぞ愉快一睡一沉醉一夢の覚果て今又夢の行方と知らぬ



此隣座敷とろり敷さの下群したぐらの客きやくのりて播磨屋はりまやの声音こゑを遣つ  
ふ傍かたわららよりくんをんの藝妓げいぎ衆しゆ「モシエ私わたくしの貝い負ひの  
松島屋まつしまやさんと願ねがひます「オツト皆みなきを言い玉たまふる  
そまへ承知しやうち初春はつはる早く

役者教訓妙々奇談二編終

御届明治十五年二月八日

同 十五年三月出版

定價十五錢

編輯兼  
出版人

羽田富次郎

本所外手町廿二番地

發兌

兒玉彌吉

同 横網町二丁目十四番地



